し，これらがロシアに入った経過とマキシモウィッチとの関係を記している．B. Nordenstam は，ウプサラのツュンベリーハーバリウムの標本の写真を示しつつ本書の図と比較して，ほとんどが対比できるとしている．大場秀章は図の植物名の同定と学名の出典を整理して分類順に示し，今後の研究に有用な情報を提供している．彼はまた，ツュンベリーが日本に好感を抱いたのは，当時のわが国社会のバックグラウンドであった儒教的教養の反映によると考察している．本書の Appendix は，B. Nordenstam による Icones Plantarum Japonicarum の再検討で，出版の経過を当時の往復書簡によって詳細にたどり，従来の date に再考すべき点があることをのべ，あわせて Icones と標本をくわしく比較して，どの標本のどの部分から図が描かれたかを検討している．その結果，異なる種類の部分が一つの図に合成された'iconohybrid'がみつかっている．最後に詳細な（とくに人名の）subject index，植物名と図の索引がある．

本書の資料の発見とそのすばやい刊行は，日本や東亜の植物分類学に大きな貢献をするもので，関係者の努力に賛辞を呈したい．ふりかえって，わが国でこのような資料が，長年にわたって無事に保存されるだろうかと考えると，有力な自然誌研究機関でさえ，「利用頻度の低い図書は廃棄してしまえ」と言う館長が実在するような国では，首を横に振らざるを得ない．自然誌研究機関は「研究」ばかりでなく，今は役に立とうが立つまいが，「保存」ということにも同じ比重をかける必要があるということを，公知のものとする必要がある． （金井弘夫）

□千葉県立中央博物館（編）：**リンネと博物学－自然誌科学の源流－** 220 pp. 1994. 初刷. 1996 改訂 2 刷. 千葉県立中央博物館友の会発行（電話 043(265)3111 内線308).

千葉市中央区青葉町955-2にある千葉県立中央博物館は1994年10月1日より12月4日まで特別展「リンネと博物学」を開催した．本書はこの際にこの展覧会のために編集し，観覧者の参考に資したものである．会期後，実費で売られている．それはリンネを知り，リンネの著作を知るために貴重な資料として安価に手に入るため，展覧会後も需要が多く，1996年2月16日にも改訂2刷が出版されたのである．

スウェーデンのオラフ・レンスコーク氏はリンネの肖像画を集めることが始まりとなってリンネに関する手に入るすべてを集め，彼のいわゆるリンネコレクションは5000点に及んだ．すなわちリンネ前後の植物分類学書をはじめ弟子たちの論文，リンネの伝記を集めたが，リンネの著作はもちろんその中心をなす．また彼の肖像画やメダルをたんねんに集めている．

この記念すべきリンネ・コレクションをスウェーデン学問発達に入要な金のため売却することを決断したレンスコーク氏とこの高価な価値ある資料を購入した千葉県立博物館，さらに千葉県民に対して尊数の念を表明せざるを得ない．最近各地の美術館が，一枚の適切高価な西欧名画を購入することをきくが，これと同様の値段で近代生物学の父ともよばれるリンネの立派な資料が購入されたわが国に初めて置かれたことを喜びたい．

館長沼田　眞氏のあいさつ，レンスコーク氏の「リンネ資料を蒐集して」についで色彩刷の植物図が9-23ページにわたって引用され，24ページはリンネ関係の現地写真，25-80ページはリンネの書物の中の図（その多くは彼の「クリファード庭園誌の中の植物図）の後，記事があり，列記すると，P.81, 最高のナチュラリスト，リンネ（木村陽二郎）. p.91, 分類学の黎明期における生物分類と種概念（直海俊一郎）. p.105, リンネと医学（梶田　昭）. p.111, リンネと生態学（沼田　眞）. p.117, リンネと昆虫学（小西正泰）p.125, リネーとロシアの博物学者（小原毅）. p.131, 植物分類学の始祖としてのリンネと種名のタイプ（大場秀章）. p.137, 動物と植物の学名について. p.143, リネアン・ソサエティ：その歴史と現状（大場秀章）. p.149, ロンドンのリネアン・ソサエティ訪問記（林　浩二）. p.153, リンネと鳥類学（桑原和之・茂田良光）. P.155, 自然の体系（初版）（訳：遠藤泰彦・高橋直樹・駒井智幸）. p.161, 展示品解説. p.211, リンネ関係のメダル（大場達之）. p.218, リンネ関係年表.

記事の中に多くの図版があり，リンネの肖像リ

ンネのメダルの図があり，特にリンネの著作のほとんどすべてのタイトルページが写真示されていることは重宝である． （木村陽二郎）

□ **Temperate Bamboo Quarterly 2 (1-2)** 60pp. 1995.

この雑誌については山崎　敬氏がさきに紹介したが，このたび最新号（2巻1-2合併号）を手にしたのでもう一度紹介する．本誌は学術誌というよりは同好会誌あるいは同業誌で，日本なら山草会誌に近い性格のものだろう．だから内容は至極肩のこらないくだけた文章で，分類，利用，栽培，園芸，観察記録，文献紹介など多岐にわたって楽しげに書かれている．レターフォーラムなどは，頁のすき間を縫って行ったり戻ったりしながら編集者とのトークが気楽に続けられている．年会のスケジュールを見ても，ピクニック気分である．日本では会誌というと堅苦しくなりがちだが，これはむしろパソコン通信のハードコピーといったところである．見出しを拾うと，食物としてのタケノコ，（テネシーでの）各種タケノコ出芽の観察，竹と修景デザイン，竹利用の新展望，耐候性レポート，ジョージア州サバンナの竹植物園の紹介，アメリカで入手可能な種のリストとその形質……などである．竹や笹の研究・利用・栽培については，わが国には多くのベテランがいるので，情報提供したら喜ばれるだろう．背表紙の写真には竹薮の中の竹垣にはさまれた道に，竹箒と竹杖を手にした翁嫗（嫗の方がいばっている）が嫁と孫を遠景に写っているが，これはエジソンが白熱電球のフィラメントの探索に世界へ派遣した三人の一人，J. Ricaltonの日本での作品であるそうだ．連絡先はどこにも書いてない．あまりに気軽な会なので必要ないのだろう．山崎氏の文から転記する．Mr. Adam Turtle, 30 Myers Rd., Summertown, Tenn. 38483-9768 USA. 山崎氏の紹介文は「誰か翻訳してくれ」と付記して和文のまま載せてある．

（金井弘夫）